


平成 28 年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	神戸大学大学院人文学研究科	職名	博士課程後期課程	助成金額	100,000 円
氏名	居村匠 	メールアドレス	imura.t.166.crtc@gmail.com		
研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）					
オズワルド・ヂ・アンドラーヂ「食人宣言」における機械技術の意味についての研究					
助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）					
<p>本研究は、オズワルド・ヂ・アンラーヂ (Oswald de Andrade, 1890-1954) の著作「食人宣言」(1928) におけるにおける機械技術についての記述を対象に、当時の社会状況に即して分析をおこなうことで、その食人をめぐる思想にとって機械技術のもつ意味を明らかにすることを目的とした。研究目的の達成のため、以下の三点が予定されていた。アンドラーヂと当時のヨーロッパの前衛芸術運動との結びつきについての調査、テレビの技術的な発明・普及の過程と、ブラジルでの受容についての調査、アンドラーヂにおいて機械技術がもつ意義についての考察である。</p> <p>助成金の給付を受け、関連する書籍の購入、調査をおこなった。まず、その結果あきらかになったのは、アンドラーヂにおいて西洋前衛との結びつきがいかに重要かということである。アンドラーヂは最初の渡欧以来、一貫してヨーロッパの前衛芸術家たち、ダダ、未来派、シュルレアリスムの芸術家たちと交流をおこなった。1920年代のアンドラーヂの芸術活動についても、その背景には彼らの存在がある。機械技術への関心、食人というモチーフでさえ、ヨーロッパ前衛に時代的な先例を見出すことができる。ただし、両者には西洋/非西洋という立場の違いがあり、食人モチーフへの態度も異なる。アンドラーヂを単なるエピゴーネンとし、そのオリジナリティを過小に評価することについては慎重になるべきである。</p> <p>ついで、食人の思想における機械技術の重要性を考えるにあたって、予備的な分析として 1960年代、70年代に活動したブラジルの美術家エリオ・オイチシカの諸作品、とりわけその代表作《トロピカリア》についての分析をおこなった。《トロピカリア》は、1967年に制作されたインスタレーション作品で、展示会場に敷かれた砂や小石とそこに建てられたふたつの小屋からなる。この小屋のひとつにテレビが設置されている。この作品は作者の言葉などによって、アンドラーヂとその食人の思想からの影響が一般に認められている。しかし、アンドラーヂが能動的な食人者として西洋の影響を取り込んだのに対して、オイチシカはこの作品について「テレビのイメージに食べられる」経験をすると述べている。私はここにオイチシカの食人の思想の独自の展開があると考え分析をおこなった。分析をつうじて、この「食べられる」経験の導入が、〈食人の思想〉の展開であり、アイデンティティの収奪と近代的な統御された人間像への批判として機能していることが明らかになった。また、ここで機械技術はその自動性によって、非人称的な侵襲を観者に対しておこなうものであった。この研究の成果は、「エリオ・オイチシカ《トロピカリア》における侵襲性と〈食人の思想〉」として学会誌『美学』に掲載された。</p> <p>今後の課題として、今回の成果をもとにアンドラーヂと西洋前衛たちの作品との比較分析をおこなうことがあげられる。機械技術とプリミティブなモチーフとの併用、組み合わせに着目して分析をおこなうことで、アンドラーヂの独自性がいっそう明らかになることが期待される。</p>					
助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。）					
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)		
居村匠	エリオ・オイチシカ《トロピカリア》における侵襲性と〈食人の思想〉	『美学』	2017年12月		